

オオムギ裸黒穂病の発病株



オオムギ裸黒穂病は種子伝染性病害です。保菌種子から生じた株の穂に黒粉（厚壁孢子）を生じ飛散して、健全株の穂に花器感染します。感染した種子は翌年出穂時に病徴を表しますが、当年には外観上の発症はないので、黒穂症状の発現は保菌種子から生じた株に限られ、「株ごと」に発病が見られます。

発病株に健全穂が混ざっているように見えますが、根元をよく洗ってみると発病株（左）と健全株（右）に分かれました。発病株は健全株よりやや早く出穂していることが見て取れます。発病株は花器感染するために健全株より先に出穂し発病します。健全株の開花前に発病株を抜き取り処分する必要があります。

発病穂は、はじめ黒粉が子実ごとに薄膜で覆われていますが、のちに破れて黒粉を飛散します。薄膜のあるうちに、少しでも早く抜くことが重要です。

発病穂が黒粉を飛散し尽くすと、中軸のみを残して「裸」になるのが病名の由来です。

